

第13章 人間の内と外とあわい（間）に潜む“未知の未知”の力^{1 2 3}（前編）
——【概要】・【第1部 現象論】——

村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所）・村瀬智子（日本赤十字豊田看護大学）

われわれにとって危機や不確かな状況というのは、たいていの場合、人生途上に現れた何か例外的な事態・・・予測不能な力ということができます。しかし・・・わたしが提案しようとするのは、それとはまったく対照的な見方・・・すなわち・・・危機や不確かな状況こそが人生を意義あるものにする・・・人間として生きることの意味を定義づけるのです。

アーサー・クライマン、江口重幸、皆藤 章
『ケアをすることの意味——病む人とともに在ることの心理学と医療人類学』
朝日選書, 2015, 25 頁

音楽演奏はそれが芸術であるときのみ感染する。それは、いとも簡単に引き起こされていくように思われるが、演奏者が限りなく小さなきっかけを見つけるその瞬間に生ずる。このきっかけを、外的形象によって教えることはできない。それは人間が感覚に身をゆだねるときにのみ見いだされるからである。

トルストイの言葉
レフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキー
『記号としての文化——発達心理学と芸術心理学』
水声社, 2006, 198-199 頁

わたしは人類の歴史を一つの全体としてながめようと試みたのである。・・・わたしの『研究』は、歴史研究の単位を探索することから始まる。それは、比較的到自己完結的で、したがって歴史の他の部分から切り離してもある程度まで一つのまとまりをもった単位である。

アーノルド・トインビー
『図説 歴史の研究』学習研究社, 1975, 8, 15 頁

¹ あわい（間）という言葉は、サウンドアーティストの岡野弘幹氏から「Emergence From Awai（あわいから生まれる創発）」（2020）という作品を通して教えていただいた。岡野氏は、2021年12月18日（土）の日本赤十字豊田看護大学・京都大学こころの未来研究センター人文社会科学・文理融合的研究プロジェクト共催のオンライン・シンポジウムの出演者である。シンポジウム終了後にいただいたメッセージ——すなわち、「昨今のデジタル社会は01で全てを表現しようとする感覚を覚えますが0と1の間にも永遠がある、そんな気持ちで作った作品です」——に深い共感を覚える。

² 西洋科学は、二項対立的論理（「Aである」と「Bである」の二項対立）にしたがって、物質や生命や宇宙の‘不思議’を探究してきた。その結果、現実の一面は明らかにされるが、他面は見過ごされてしまう。なぜなら、対立する二項の間にあっては、論理的な矛盾に陥るために、決して捉えられない世界がどこまでも‘無限に’潜在化してしまうからである（ジュリアン、2004）。ここに、現実内に存在するプロセスそれ自体から——すなわち、内的な必然から——現実が自律的に創発すると捉える“パラダイム転換”の必要性がある。その意味では、二項対立に基づくジレンマを踏まえながらも、それを超えたテトラレンマ（【コラム3】参照）への気づきが“パラダイム転換”への契機となる。

³ 本稿の表題は、「人間だけが地球の主人ではない」というアニミズムの思想に通ずる。人類学者・奥野克巳（2022, 200 頁）によれば「アニミズムは、古い宗教形態でも、たんなる精霊信仰でもない。私たち人間に共通してみられる、人間の精神的傾向である」。その本質は「人間と人外の間で、互いが身体的・物質的な見かけは異なるが、内面的・精神的な面では通じているとする思考と実践である」。その際「人間と動物の間で‘私’が‘私＝ではなく’‘私＝でもなくはない’という状態を高速で揺れ動く過程で、人間と動物を隔てる境界が次第に薄れ、人間の人格と同等の知的・情動的・霊的な存在者が目の前に立ち現れる」と説く（本稿【コラム3】、後編【コラム5】）。同様に、鈴木大拙（1997, 71 頁）の「即非弁証法」では‘否定’を媒介にして真実を‘肯定’する。「Aは非Aだから、それ故にAである」というところまで徹底しなくては、仏教および他の東洋的なものの深所に手を着けるわけには行かないからである。

【概要 ——パラドックス・アブダクション・フラクタルと NECTE（ネクテ）理論】⁴

私たち人類は、混沌とした世界の中で、生まれ・育ち・老いて・病み・死んでいく。“生命過程還元論”にもとづいて提唱した「自己・非自己循環理論」（村瀬、2000）から 20 余年が過ぎた。今こそ、ポストパンデミック時代における新たな未来展望を語る時が来た。

本章では「複雑な現象」の「単純な理解」に挑むとともに、その実践的展開例を示したい。簡潔に言えば、「複雑な世界」を「複雑な人間」が「複雑な方法論」を用いることで、逆説的にすべてが「ダイナミックに変容するシンボル」⁵——すなわち、パラドックス（逆説）・アブダクション（転移）・フラクタル（入れ子単位）からなる創発過程⁶——へと統一される。その時、混沌とした世界の‘真理’が、既に与えられていたと自得される（頼住、2004）。

ここに、学びや癒しを含めたあらゆる人間活動に伴う「創造と崩壊」の核心がある。

その醍醐味を紐解くきっかけとして、西田幾多郎を引用したい。

統一によって或る一つの状態が成立したとすれば、直ちにここに他の反対の状態が成立しておらねばならぬ。一つの統一が立てば直ちにこれを破る不統一が成立する。真実在はかくのごとき無限の対立をもって成立するのである。

日本の名著『西田幾多郎』「善の研究」中央公論社、1984、35 頁

西田幾多郎の言う「無限の対立をもって成立する真実在（‘真理’）」とは、何だろうか。

(1) 私たち自身（自己）であり、(2) 私たちがその中で生まれ、死んでいく世界（非自己）であり、さらには、(3) 私たち人類が自身（自己）や世界（非自己）を理解するための方法（自己・非自己循環）であると捉えたい。これら三者——すなわち、自己・非自己・循環——が、矛盾し合いながらも（パラドックス）、互換し合い（アブダクション）、包摂し合うことで（フラクタル）、新しい表現や意味が次々と生み出されていく【コラム 1 参照】。

ここに、未曾有の災禍が絶えない世界の本質があり、混沌とした世界の意味を理解する秘訣がある。そして、本章が自ら語りはじめる“創発の仕掛け”がある。

⁴ 【概要】の内容を文章で十分に表現することには、限界がある。そこで【補足 1,2】と【コラム 1,2】を挿入した上で、図式化を試みた。

⁵ シンボルとは何だろうか。例えば、『未来創成学の展望』（山極壽一、村瀬雅俊、西平直、ナカニシヤ出版、2000、47 頁）に掲載した“シンボルとしてのマンダラ”（図 1-14）を参照して欲しい。【概要】に表示した図 1, 2, 3 や“高次化したヴィゴツキーの三角形”（図 4 右）も、シンボルと言え。その意味では、シンボルは無数に存在し、また無限に構成され続ける（ユング、1991）。シンボルは創発する全体性であり、その全体性が“構造主義”の「構造」と深くかかわっている（ピアジェ、1970；村瀬、村瀬、2021）。もちろん、創発過程には一貫した原理が働いている（村瀬、2000；村瀬、村瀬、2020a, b；2022a, b；Murase, 2018；Murase et al., 2021）。その点で、シンボルは個別的でありながらも、どこまでも普遍的なのである。すなわち、「個別」と「普遍」を二項対立項として静的（スタティック）に捉えるのではなく、徹底した「普遍性」を踏まえた上での自由な「個別性」の発露として動的（ダイナミック）に捉える必要がある（戸田、1992）

⁶ ここで述べている「複雑な方法論」とは何だろうか。それが、複数の逆説（パラドックス）、異なる概念間の類推（アブダクション）、多様な時間・空間スケールの入れ子単位（フラクタル）を同時に駆使することである。実は、この方法論を特徴づける三つの特性は、本章の冒頭に引用した三つの文章におけるそれぞれの主題——すなわち「対照的な見方」「感染」「まとまりをもった単位」——と対応している。これがダイナミックに変容するシンボル——つまり、本章が自ら語りはじめる“創発の仕掛け”——である。

そればかりではない。この「複雑な方法論」を駆使して「複雑な世界」や「複雑な人間」の「単純な理解」を自得することで、私たち人類がこれまで個人においても、集団においても、時代を超えて、民族を超えて取り組んできた超課題——すなわち、「人間とは何か」、「世界とは何か」、「真理とは何か」など解明困難とされてきた諸課題を包摂・統合する究極的な課題である「精神・物質・真理の大統一」（フレンケル, 2015, 348 頁）——への解決の糸口が見いだせるに違いない。もちろん、こうした超課題の探究には、“パラダイム転換”が欠かせない。そのためには、思索による探究ばかりでなく、直観を頼りに感じ取り、経験を踏まえて体得し、実践を通して検証する必要がある。それが、先に述べた“創発の仕掛け”に他ならない。

その本質こそ、「自己」である主体と「非自己」である客体との「循環」——すなわち、「自己・非自己循環」——である。ここに“対話（ダイアログ）”を介した“ケア共創”の原点がある。なぜなら、全ての個人が、互いに癒し・癒される関係を構築できると気づいたとき、混迷を極める世界の意味が理解され、共有されることで、ケア共創がはじまるからである（【コラム 2】参照）。その際に、様々な見解が存在することを受け入れるとともに、自らの一面化した意見に固執する姿勢を改めなければならない。つまり、私たちは世界・自然・人生という物語の作者であり、登場人物であり、読者である。その多様な経験を踏まえることこそ、答えのない世界を幸せに生き続けられる‘悟りの境地’への路ではないだろうか。

本論考の目的は、私たちがそのような境地に至り得る“創発の仕掛け”——それは、本章が自ら語りはじめる“創発の仕掛け”でもある——を試論として展開することにある。そのために、「一人称の主體的な自己（内）」と「二・三人称の客体的な非自己（外）」と「それらの対話的な自己・非自己循環過程（間）」に基づく逆説性（パラドックス）・互換性（アブダクション）・包摂性（フラクタル）を仮定したい（本稿、脚注 3 “アニミズム”，24 “ブートストラップ”参照）。その上で、いたるところに潜在化している“未知の未知”の力に委ねたいと思う。

これから読者のみなさんとともに、“未知の未知”の世界へと歩み出したい⁷。

⁷ バルト（1979）は、物語の構造分析において「物語の語り手は誰か」と自問し、三つの可能性を自答した。

(1) 作者：物語は「外部」にいる‘作者であるわたし’の表現。

(2) 神：登場人物の「内部」にいる（彼らの内面で起こることをすべて知っている）と同時に、登場人物の「外部」にいる（特に一人の人物と同一化していない）。

(3) ジェームズやサルトルの考え：登場人物が交互に物語を語る。

ところが、(1), (2), (3)は、語り手と登場人物を現実の‘生きた’人間とみなしている点で、具合が悪いとバルトは指摘する。なぜなら、作者不明の神話や民話が多いからである。そして (4) の可能性を提示した。

(4) 物語に内在：語り手の記号は、物語の「構造」に内在する。つまり、物語自らが語る“創発の仕掛け”を、「構造主義」と関連させたのである。筆者らは、(1), (2), (3), (4)を踏まえた上で、(5)をも考慮した。

(5) 読み手：筆者らは、読み手の重要性をも考慮することにした。ここに、本章で展開する「一人称の主體的な自己（内）」と「二・三人称の客体的な非自己（外）」と「それらの対話的な自己・非自己循環過程（間）」の逆説性（パラドックス）・互換性（アブダクション）・包摂性（フラクタル）の仮定を置く根拠がある。そこで、筆者らの論考をまとめたい（以下、村瀬、村瀬、2021、206–207 頁より引用）。

心理学者のユングによると、感性と理性が同時に働くと、両者を規定する力が相殺され、この対置によって、ある否定がもたらされる。対立がなくなるために、意識は「空」となり無意識へ心的エネルギーが退行する。その結果、シンボルが生まれる。このシンボルが物語の語り手の表現としての記号として働くのではないだろうか。もしそうであるならば、語り手の記号は読み手に内在しているとも言える。シンボルという「存在」は、それが「理解」される必要があるばかりでなく、それを「生み出す」必要がある。・・・（シンボルとしての）マンダラは「構造」として捉えることができる。なぜなら、マクロとミクロとこころの相同性を表しており、西田幾多郎の言う「発展、存在、認識」の相同性を表しているからである。

物語の語り手が物語に内在しているとともに、読み手にも内在しているからこそ物語が理解できるという「ものの見方」は、自然が奏でる物語を読み解く際にも、同様に活用できるのではないだろうか。

*****【補足 1 : NECTE (ネクテ) 理論 : 創造性と破壊性の起源と進化】*****

芸術教育学者のベティ・エドワーズ (1988) は「創造性とは何か」と問い、歴史的な探究の成果を、次のようにまとめた。

19 世紀ドイツの物理学者・ヘルムホルツは、飽和 (saturation)、醗酵 (incubation)、啓示 (illumination) の 3 段階仮説——図 1 の拡張、収斂、転移にそれぞれ対応——を提示した。ここで‘転移’は、同時代論理学者・パースの提唱するアブダクション (矢野、2023) に対応する。1908 年、フランスの数学者・ポアンカレは検証 (verification : 図 1 の創発に対応) を加えて 4 段階仮説を唱えた。検証とは、誤りや有効性を確認する段階である。1960 年代、アメリカの心理学者・ゲッツェルズがヘルムホルツの飽和の前に、問題発見 (problem finding : 図 1 の否定に対応) の段階を加えて 5 段階仮説を提唱した。

私たち筆者は、それらを図 1 に示す 5 段階 NECTE (ネクテ) 理論として提唱した。その意図は、5 段階の過程が単なる創造性 (エドワーズ、1988) ばかりでなく、崩壊過程をも特徴づけており (コリンズ、2010)、さらには精神的葛藤の生成・消滅を特徴づけている (キューブラー・ロス、1977; セルヴィーニュー、スティーヴンス、2019) ことが明らかとなり、より一般的な名称を用いて 5 段階過程を表現したかったからである (村瀬、村瀬、2000a, b) ⁸。

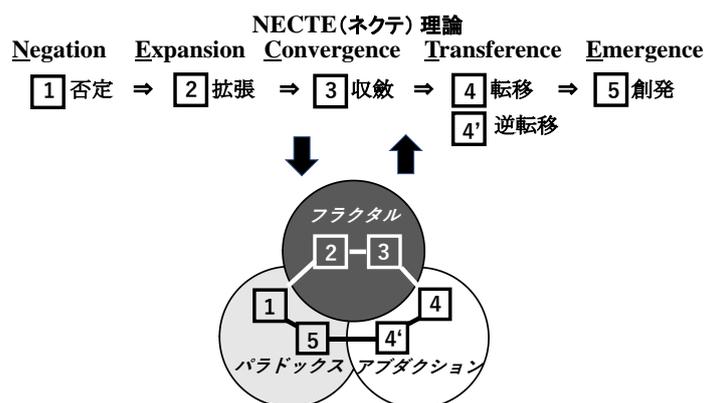


図 1 : NECTE 理論とパラドックス・フラクタル・アブダクション

図 1 上段には、5 段階からなる NECTE 過程が直線的に表示されている (4 番目の転移に、その逆向きの過程を表現するために、逆転移を加えている)。この直線状の過程は、必ずしも常に直線状に進行するとはかぎらない。図 1 下段に示すように、ループ状になることもあれば、折れ線状になることもある (村瀬、村瀬、2000a, b)。否定と創発がパラドックス、拡張と収斂がフラクタル、転移と逆転移がアブダクションにそれぞれ対応する。生命や自然の本質は、これら 3 つの特性で捉えられる。そのダイナミズム自体が、さらなる創造性と崩壊性の起源と進化を駆動していく。ここに、Jantsch (1980) が指摘する「共進化 (共創)」や「メタ進化 (進化機構の進化)」、さらには『崩壊学』の中でセルヴィーニューとスティーヴンス (2019) が危惧する「共崩壊」や「システム崩壊」に共通する起源がある。

⁸ 「NECTE 理論」とは、図 1 (上) に示すように、各段階に対応した英語表記の頭文字をつなげて命名された。命名者は、2018 年 2 月に京都大学未来創成学国際研究ユニット・特別招聘外国人教授として来日していた Tae-Soo Chon 教授である。この「NECTE 理論」は、“自己・非自己循環理論”に埋め込まれていたこと、さらにこの 5 段階過程は、絵を描く過程、創造的な問題解決過程、社会変革のダイナミズムなど、多様な場面において働いていることがわかってきた (村瀬、村瀬、2020a, b; 2021; 2022a, b)。

*****【補足2：自己・非自己循環理論と NECTE (ネクテ) 理論の関係】*****

自己・非自己循環理論には、5段階 NECTE 理論が含まれている。図2では、自己の現状を①「否定」することによって、未来の目的・目標を設定する。その未来目標を念頭に置きながら、視点を②「拡張」する。それによって、「非自己」である客体の存在に気づく。その客体の情報を主体に③「収斂」する。偶然に、あるいは必然的に、主体による意識の④「転移」が起これると、予想外の仮説や対象を新たに見出す。この新たな仮説や対象から、新理論や新実験が⑤「創発」し、目的・目標の検証が行われる。

ここで、①から⑤への過程は、必ずしも一方的に進行するとは限らず、先に新理論や新たな実験事実が、未来目標として提示され、その裏付けや検証が後から生じることもある(下向き矢印)。もちろん、未来目標と現状とのギャップに戸惑い、悩むこともある。その際に、「何がまだできないか」と現状を否定的に捉えるのではない。「何ができるようになっていくのか」と未来目標を明確にイメージしながら、現段階でできる限り努力することに‘自主的’に集中する。その為には、「なぜその目標に向かって努力することが必要なのか？」という明確な動機付けが求められる。未来目標と現状との間に、技能的ギャップは当然ある。しかし、そのギャップを埋めるべく、日々の努力を惜しまないという‘学習態度’においては、現在も未来も変わることはない(頼住, 2004, 2022)。日々の努力である‘部分’と未来目標である‘全体’とが、どこまでも矛盾なく重なり合う。この時、目標に向かって努力を惜しまない動機付けが明確であれば——私たちがかつて歩行することを覚え、言語を習得し、自転車に乗れるように成長してきたように——驚異的な飛躍体験として目標が達成される。

実は、五つの段階からなる NECTE 理論は、三つの特性(パラドックス・フラクタル・アブダクション)と互換性があり(図1)、その本質は一つ理論である自己・非自己循環理論に含まれていたのである(図2)。

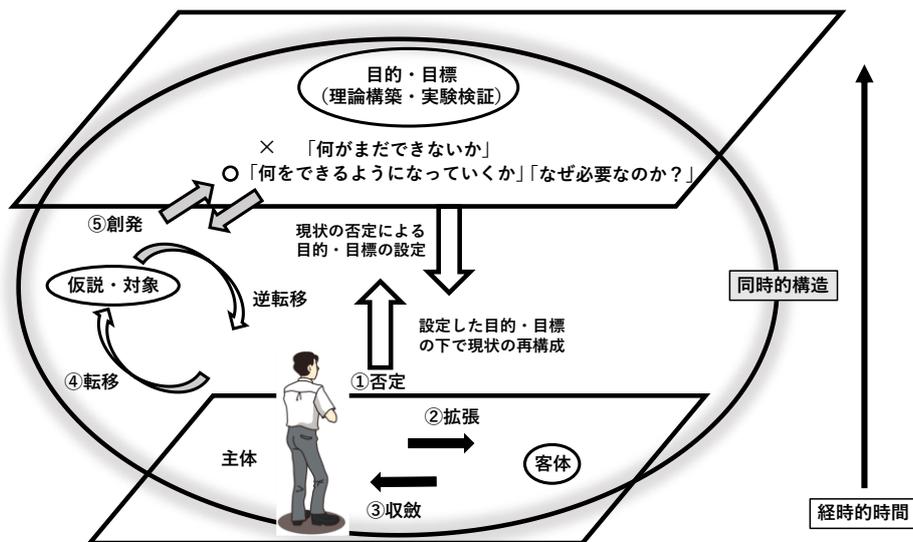


図2：自己・非自己循環理論（主体と客体の相互循環）と NECTE 理論

上記の【補足 1, 2】において、重要な点は、単に新たな結果が探究されるだけでなく、それ以後に持続的に展開する創発過程が含まれていたことである。一つの自己・非自己循環理論が、三つの特性（パラドックス・アブダクション・フラクタル）を含み、五つの過程からなる NECTE 理論へと展開している。その本質は、図 1 と図 2 に暗示されているように、新しさが「無限」に創発することにある。この無限性によって、多様な状況への適応性が増す。矢野雅文氏が本書で指摘するように、経時的過程においては原因と結果を“因果律的”に捉え、同時的構造においては部分と全体との一貫性を調和律的に捉えることができる。

それらを図式的に表現できないだろうか。それが図 1 と図 2 である。NECTE 理論における五つの経時的要素過程（図 1 上）と同時的に捉えた構造図（図 1 下）、そして両者間の双方向的循環過程が表現されている。図 2 では、設定した目標に向けて要素過程間や部分と全体の関係性が調整されることで、目標が達成され、全体システムの調和が導かれることを示している。

これまで、「生命とは何か」という問いが十分に解き明らかにされてこなかった。その理由は、探究方法に問題があったのかも知れない。その問題とは、生命という全体を「要素還元論」に従って、生命の特性を含まない構成「要素」である物質に還元したことにあった。この探究方法は、はじめから不成功を運命づけていた。なぜなら、生命のある全体を生命のない物質に還元したために、生命の特性を説明する道をあらかじめ閉ざしたからである（ヴィゴツキー、2001）。非生命的要素ではなく、「生命単位」——すなわち、説明されるべき生命の全体性をそなえた「単位」——に分ける探究方法が必要であった。その生命単位を、「自己・非自己循環」という過程として捉えたい（村瀬、2000；村瀬、村瀬、2022a, b；本書、3.4.節、脚注 24；奥野、2022）⁹。

1960 年代に素粒子物理学者・ジェフリー・チョウによって提唱されたブートストラップ哲学（本章、脚注 24 参照）がある。「自然法則は、部分と全体が一貫性をもつとの要求から演繹される」（村瀬、村瀬、2020a）。従って、混沌として答えのない世界を幸せに生きるとは、図 2 に示した主体と客体における「自己・非自己循環過程」という単純な「生命単位」から、無限の発展可能性を創発する柔軟性や弾力性——すなわち、レジリエンス——に秘訣があると言える。なぜなら、「外」の混沌世界と「内」のレジリエンスとは、一貫した‘鏡像関係’となるからである。

フランスの哲学者・フランソワ・ジュリアン（2004）によると、西洋の哲学では、戦争は予見できず偶然によって支配されると考える。これに対して、中国の思想では戦争は内的な必然によって展開すると捉える。すなわち、現実をそれ自身のプロセスに内在する論理から解釈できると考えるのである。軍師にとっての勝利とは、自軍に有利になるよう生じさせた不均衡から必然的に導かれる予期できる結果に他ならない。そのために、よい戦略は、誰にも気づかれず、その行為は普通の人にはもはや見えない。しかも、次に来る出来事の推移を効果的に支配できるために、敵軍の数がどれだけ多くても、戦おうと思う者は誰もいなくなる。なぜなら、数の多さという量的な関係は、両軍の勝敗を決定づけるより高次の絶対条件に対しては劣ってしまうからである。

ジュリアン（2004）は、戦場での軍隊の配置ばかりでなく、書の文字や描かれた風景が示す配置から、文学の諸記号が作り上げる配置に至るまで、すべて「形状の中に働く潜勢力」という主題として統一的に捉えようとした。私たち著者は、同じ主題を困難な制約を乗り越え続けていく動的なレジリエンスへと拡張した上で、生命の適応や人間の学びと癒しに備わった本質——すなわち、共創力——として捉え直したいと思う。

⁹ 生命単位として、時間的な流れの中においてはじまりとおわりがあり、空間的な広がりにおいて一つのまとまりを持った全体性（自己完結性）が要求される。生命単位は、生成・成長・変容・消滅をくり返すために、空間的な境界は固定されることはない（『歴史としての生命 増補版』第 9 章、181–182 頁参照）。

*****【コラム1: ヴィゴツキーの三角形を高次化する】*****

実は、本章で述べている三者（自己・非自己・循環）は、ヴィゴツキーの三角形「主体と客体と道具」（図3-I）と対比することができる。人間という主体が道具をつくり、それを外界にある客体に対して使うことで外界をつくと同時に、逆に、その道具を使う人間自身がつくられていく。それらが双方向的に働き合うことを \Leftrightarrow （双方向的矢印）で示している。こうしたダイナミックな関係が、「私（主体1）と他者（主体2）と記号」（図3-II）へ、そして「私（主体1）と認識（脳）と自己刺激」（図3-III）へと変容していく。それによって、（I）道具を介した自己と客体の対峙から、（II）記号による他者とのつながりへ、そして（III）他者を通じた自己理解へと進む。これが「三段階からなる精神の文化的発達」としてヴィゴツキーが捉えた生成変容過程である（佐藤、本田、菊谷、2019）。

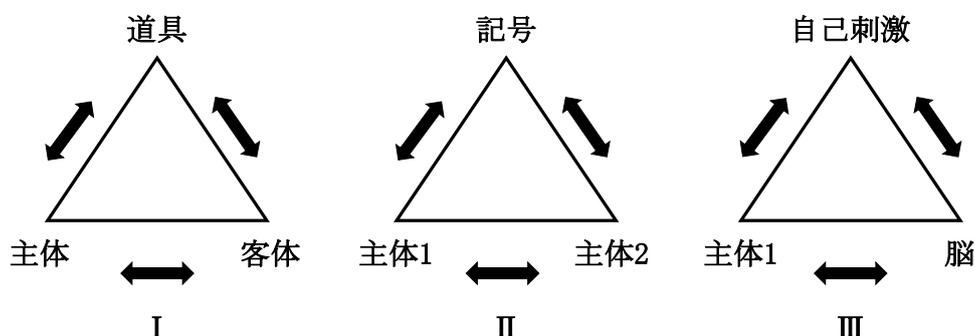


図3: ヴィゴツキーの三角形と「三段階からなる精神の文化的発達」¹⁰

私たち筆者は、三つの発達段階（I、II、III）の表示の仕方について対話を重ねた。というのは、図3のように段階的かつ直列的に表示すると、特定の発達過程とその結果があらかじめ決められているような印象を受けてしまうからである。西田幾多郎の言う「真実在」（‘真理’）とは、二項対立的な論理に基づく‘議論’によって一つの状況や見解に絞られるものではない。混沌とした世界であるからこそ、二項対立を超えて多様な状況や異質な見解の共存——すなわち、‘対話’——が必要となる。その結果、統一と不統一の間を揺れ動くダイナミズムとして「真実在」（‘真理’）が「おのずからしか然る（伊藤、2002）」（本稿、図1）。

¹⁰ 精神の発達には、自然的発達と文化的発達が考えられている（佐藤、2019、60頁）。自然的発達とは、進化によって人類が獲得してきた「生まれながらの特性」——すなわち、生得的な特性——の発達過程であり、文化的発達とは、文化的・社会的な関わりのなかで言語・記号・概念・道具——すなわち、文化遺産——の使用によって、人間精神の活動が再編成されていく学習過程である（ベロス、2012、65頁）。

ベロス（2012）の『素晴らしき数学世界』には、ノーム・チョムスキーの弟子ピエール・ピカが、ブラジル・アマゾン川流域の先住民族ムンドウルク（人口7000人ほどの狩猟採集民族）と暮らしながらフィールド研究を重ねた後、パリに戻った後の衝撃的な出来事が語られている。ピカは、アマゾンから戻った直後には、時間・数・空間の観念を失っていた。そのために、約束を忘れ、単純な道で迷うことが多く、改めてパリに適応しなおすのに、非常に苦労したという。現地では数を数える必要もなく（5より大きな数はない）、時間の経過を気にすることもない。そのため、記号や概念という文化遺産を簡単に忘れてしまう。

私たちにも、類似の経験がある。パソコンを活用して文章を書いていると、筆記によって漢字が書けなくなる。ナビゲーション・システムで運転していると、道順や空間配置が分からなくなる。皮肉にも、これまでの文化遺産は新たな文化遺産によって簡単に上書きされていくようである。

そこで、三つの発達段階（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）が共存する図式を考えてみたい（図 4）。その意図は、ヴィゴツキーの三角形をベースとしながらも、より高次化したヴィゴツキーの三角形を表現することにある。発達段階をすでに存在している初期構造の「捉え直しの新しさ」に求めたのである。部分と全体が自己相似性を持つフラクタル構造として配置することで、一貫性を保持しつつも、無限の発展可能性が暗示されている。つまり、部分的にしか表現が尽くされていないもの、表現を越えるために暗示されるしかないもの、まだ存在していないが新しく生成されてくるもの、さらには、今ここに、存在しているが突如として姿を変えてしまい、あるいは消滅してしまうもの、そうした無限の可能性が含まれている。その本質は、「過程の結果が新たな過程を創り出す過程になっている」ことにある（脚注 5, 6 参照）。

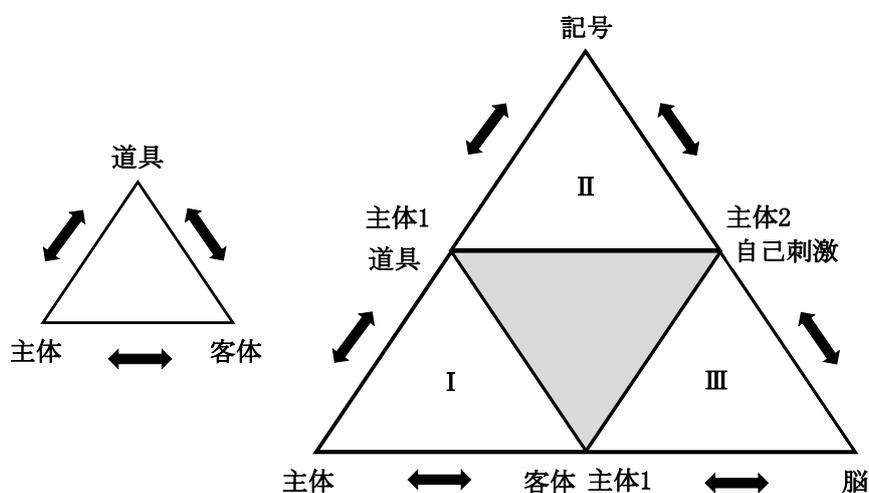


図 4：ヴィゴツキーの三角形（左）と高次化したヴィゴツキーの三角形（右）

この図を書き終えた段階で、セイックラとアーンキル著『オープンダイアログ』（日本評論社、2016）に出会った。あとがきの中で、訳者の一人である高木俊介医師が、社会（三つの異なる共同体）と家族（母、父、子からなる共同体）を自己相似的なフラクタル構造として配置した図を提示していた（同書、230 頁）。その本質が、図 4 に示したヴィゴツキーの三角形（主体、客体、道具）を基盤とした高次の三角形と重なる。

高木の意図は、次のように語られている。一方では、社会は家族の親密性を取り入れることで絆を重んじ、他方では、家族は社会を‘鏡’とすることで、家族が抱える葛藤を緩める役割を果たすことにある¹¹。

¹¹ 佐藤ら（2019）は「見えるものと見えないもの」への展開における‘鏡’の役割に注目する。確かに、私たちは自身の身体を直接見ることはできない。それを‘鏡’に映して外的に見えるようにする。それによって身体的自己を形成する。さらに、身体的自己に能動的に関わることで「働く身体」を明確にできる。ここで、私たちが自身を鏡に「投影」（転移）し、自身の身体象を映っているものとして「受容」（逆転移）する。この転移と逆転移は、双方向で起こるアブダクションという過程である。この観点をリハビリに励む患者と患者を支援するセラピストとの関わりに拡張できる。身体機能の回復を学習する過程において、患者にとってはセラピストや訓練課題、あるいは使用される道具が‘鏡’となる。自身の身体象と身体が抱えている機能的な課題を明確にできるからである（「投影」については、後編・第 9 節参照）。

重要な点は、三者のそれぞれが、それらの関係を介して、そのつど創り出される「現象」として捉えることにある。その際に、予期しないものが現れることに対して特定の構えを持たない「自由な構え」——すなわち、「不確実性への耐性」（本章では、「ネガティブ・ケイパビリティ」として表す）——が必要となる。それが、「自己や世界を豊かに創造する」と高木は結ぶ。

図 4（右）の本質は、パラドックス・アブダクション・フラクタルのトリレンマにある。Ⅰの頂点にある‘道具’は、Ⅱの‘主体 1’で表されている。ここにパラドックスがある。また、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲはどれも相同で互換性がある。これがアブダクションである。そして、全体の大きな三角形の中に、複数の小さな三角形が含まれている。これがフラクタルである¹²。

混沌として答えのない世界に翻弄されつづけている現代において、「単純な複雑さへの気づき」を得る「母なる知」が込められていて「ほっこり」した感覚を味わうことができる原稿を紹介したい。2020 年京都大学大学院横断教育科目群「未来創成学への招待——自然科学の哲学的基礎から心理学の芸術的展開に向けて」を受講していた当時・社会人大学院生だった大木（旧姓、金草）育美さんからの原稿である。自ら語り始める“創発の仕掛け”——「一人称の主體的な自己（内）」と「二・三人称の客體的な非自己（外）」と「それらの対話的な自己・非自己循環過程（間）」の互換性（アブダクション）・包摂性（フラクタル）・逆説性（パラドックス）の仮定——が、体験を通して語られている。

*****【コラム 2: 大木（金草）育美さんからのメッセージ 2022 年 6 月 3 日】*****

私は昨年 2021 年に娘を出産した。彼女と接していると、日々たくさんの気づきがある。

彼女は約 10 か月間私のお腹のなかにおいて、私に包含されていた。彼女は自分の細胞から分裂して生じた生命体であり、自分の延長線上にある分身とも考えられる。

しかし、「自己」というものを、同一性をもって存在するものとする、彼女は私とは別の存在である。つまり非自己であり、彼女の行動や思考は私のそれとは違っている。「なぜ泣くのか」、「なぜ天井を見ながら笑っているのか」、「なぜゴミに興味深そうに見ているのか」など、日々たくさんの疑問が生じる。大人になった私は、子どものときの気持ちを忘れて、彼女の行動に対して複雑な理由があると思いこんでしまう。

そんなとき、私はよく自分の幼少期のことを思い出すようにしている。寝るときにトントンされるのが嫌だったこと、祖母に抱っこされるときに泣いたこと、母が運転する自転車に乗っていて車輪に足を突っ込んで怪我をしたこと。様々な思い出を当時の感情とともに思い出す。

¹² ユーリア・エンゲストローム『拡張的学習の挑戦と可能性——いまだここにはないものを学ぶ』新曜社（2018）に学習科学の内的矛盾を捉えたモデルが示されている（6 頁）。そこでは、ヴィゴツキーの三角形を念頭に、拡張された三角形が用いられており、本章で紹介している図 4 と重なる観点が含まれている。

すると、幼少期の自分の不思議な行動にあまり理由がなかったことに気づく。なんとなく嫌だったり、なんとなく回っている車輪に足を突っ込んでみたくなったりしただけなのだ。

それに気づくと、自分のなかで勝手に複雑化していたことが少しシンプルになり、気持ちが楽になる。緊張感が緩むことで、和らいだ空気が娘に伝染し、彼女の表情も和らぐ気がする。

逆に、幼少期の自分の行動を大人になって振り返ることで、疑似的に当時の父や母の気持ちになり、過去の自分に対して優しくなれることもある。幼少期に親に対して申し訳なく思っていたことが、あまり大きな問題ではないことに気づき、子どものとき後悔した気持ちが昇華されるように感じるのだ。

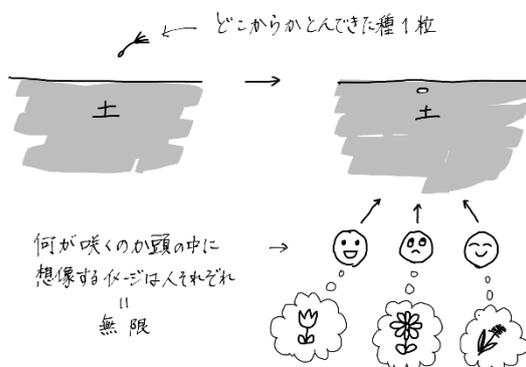
わたしたちは、複雑に考えすぎて、自分自身で他者との関係を複雑にすることがある。今回の娘との関わりのように、たとえ状況は完全に一致しているわけではなくとも、自分の記憶や考えを他者に投影して考えることで、少しシンプルに考えられるようになる気がする。

娘は自己の延長線上にある存在である。それは遺伝的な理由だけではなく、彼女の存在が「私」という存在をつくっているからだ。そして、それは過去の自分にも当てはまる。幼少期の自分は、今の自分とは見た目も考え方も変わっているが、今の「私」を形成してくれている。そう考えると、過去の自分も自己の延長線上にある非自己である。

身体的、空間的には自分と彼女たちの間には境界線があり、実際に相手が考えていることが100%分かるわけではない。しかし、自己と非自己を重ねて考えることで、両者の間にあった境界線は少し薄まり、複雑なことが少しシンプルになり、優しくなれる気がする。

これは親子関係だけにあてはまるものではなく、友人や上司、様々な人間関係においても当てはまることだと思う。周りにいる他者が今の「私」を形作っていると考えると、彼らも自己の延長線上にある非自己である。

私は、娘との関わりを通じて、自己と非自己の重なりから、複雑な思考をシンプルにすることを学んだ。



2020年の京都大学大学院講義の際、「0(あるいは1)が無数の可能性を持つことを図で示す」という課題に対して、彼女はユニークなレポートを書いてくれた。左図が、2020年5月19日に、彼女が書いた絵である。

全てを書き尽くすのではなく、一部を書くことで全体を連想するような構成である。図に書き込まれている説明は、彼女自身による。現在を暗示しているような優しい絵である。

図5：一つの出来事から無限の発展へ

【概要のまとめ】

本章で述べる、自ら語りをはじめ“創発の仕掛け”とは、何だろうか。その仕掛けこそ、‘いのちの誕生’や‘母子関係’を思わせるシンボルであり、構造主義の「構造」であり¹³、図2, 4に暗示されているフラクタル構造である。この種のフラクタル構造を‘鏡’とすることで、本章全体と【概要と補足 1, 2 ; コラム 1, 2】とが相互参照・自己参照の関係にあることがわかる。強調すべき点は、“創発の仕掛け”とは、誰かが意図して与えるものではない。自然の中にすでに存在しているのである。トルストイが指摘するように(冒頭引用Ⅱ)、そのきっかけに気づきさえすれば、自ずと自然の不思議が開示されることになる。

以下では、自ら語りをはじめ“創発の仕掛け”によって、現象論から認識論、そして実践論への展開——すなわち、【第1部 現象論】、【第2部 認識論】、【第3部 実践論】——が物語られていく。

***** 【補足3：湯川秀樹博士・生誕100年記念国際会議「生命とは何か？」】 *****



2007年10月15日-20日の期間、湯川秀樹博士の生誕100年を記念して、「生命とは何か？」に関する国際会議を主催した。そのポスターに曼荼羅を用いた。曼荼羅は人間にとって外在化された実体であるばかりでなく、それを内在化することで、こころの発展を図る道具として古くから活用されてきた。

本稿で展開する自己・非自己循環理論も曼荼羅と同じ位置づけにある。主体であり、客体であり、両者の循環を促すことで、こころの創造性が育まれるからである。

Proceedings of “What is Life?”:
Masatoshi Murase and Ichiro Tsuda
Progress of Theoretical Physics Supplement, Volume 173, pp.1-370,
Oxford Academic 2008

図6：湯川秀樹博士・生誕100年記念国際会議「生命とは何か？」のポスター



図7：国際会議「生命とは何か？」集合写真
<https://academic.oup.com/ptps/issue/volume/173>

¹³ 構造主義の「構造」とは、不変の規則とその規則によって支配される要素が変化することによって、自律的に構成される全体体系と定義される(村瀬、村瀬、2021, 51頁)。従って、‘客体’として存在しながらも、‘主体’として働き、かつ認識することができる‘生体’は、典型的な「構造」の一例と言えるのである。つまり、構造主義の観点によれば、主体と環境との関係に「構造」が形成されるとき「認識が生じる」と考える。

【第1部 現象論】

1. はじめに ——すでに、「おわりに」が含まれている

かれらは、ほかの言葉は一つも話さないで、このただ一つの彼らの慣用語を六回ぶっつけにくりかえすだけで、お互いがお互いを十分に理解したのである。これは、私が目撃した本当の事実である。

ドフトエフスキー『作家の日記』

ヴィゴツキー『思考と言語』新読書社、2001、406頁より引用

ここで語られている事実とは、ドフトエフスキーが散歩中に遭遇した6人の酔っ払いによる会話のことである。彼らは、辞書にもない意味不明な一つの名詞だけで、驚きや共感、激情や反論、思想や判断さえ表現していた¹⁴。会話全体が、たった一つの単語で成立する事実から、ヴィゴツキー(2001、366頁)は「思想と言葉との関係は何よりも物ではなく過程である」と指摘する。なぜなら、思想は言葉で表現されるわけではなく、言葉のなかで遂行されているからである¹⁵。

かつて、トルストイは「芸術家による創造の瞬間は解明不可能」と述べた(ヴィゴツキー、2006、199頁)。この論点の本質は、「創造の瞬間」を言葉によって表現することは不可能であるが、言葉によって実践することは可能である、と捉えられる。そうでなければ、『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』は、トルストイによって作品として書かれることは永遠になかったであろう。私たちもよく経験するように、話し言葉による対話では比較的簡単に考えを述べ合うことができる。ところが、いよいよ書き言葉で表現しようとした途端、言葉に詰まってしまう。感性が麻痺したかのような不思議な感覚を覚える。

この感覚こそ、松木邦裕氏が本書で論考している「ネガティブ・ケイパビリティ(負の力)」——すなわち、知性や論理的思考によって「問題を解決したい」と‘はやるころ’をあえて留保できる忍耐力——と関係しているように思われる。アーサー・クラインマン(2015、25頁)も次のように指摘する(冒頭引用I)。日常生活の危機や不確かな現実を、予測不可能な出来事として‘表面的’に片付けてしまうのではなく、「人間として生きることの意味」を見出す‘好機’であると。こころの中で‘逆説的’に捉え直す“パラダイム転換”——すなわち、「私は何者であるのか」という“自分の存在(being)”への根源的な問いを踏まえた上で“自分の発展(becoming)”と向き合うこと——こそが「正解のない世界」を幸

¹⁴ トルストイも『アンナ・カレーニナ』の中で、レーヴィンとキティが単語の頭文字だけを用いて愛を告白する場面を描写している。ヴィゴツキー(2001、401頁)は、「対話者の考えていることが一様なとき、かれらの意識が同一の方向を向いているときには、言語刺戟の役割は、最小限になる」と指摘する。その極限には、音のない『沈黙の世界』(ピカート、2021)がある。「音のない音楽」や「方法なき方法」【本稿 コラム4】、また柳生宗矩(1571—1646)の「白紙の免状」(1637年)に究極の真理が秘められている。

¹⁵ ヴィゴツキー(2001、366頁)によると「思想とは、何かと何かを関連づける、運動・流れ・展開をもつ」。つまり、「思想は、何かの機能を遂行し、作業し、問題を解くいくつかの次元を通じた内面的運動として、思想の言葉へ、言葉の思想への移行として行われる」と言う。こうして、「思想と言語の関係は、物ではなく過程」——すなわち、「一連の段階を経過する発達過程」——としてあらわれる【コラム1参照】。

せに生きる秘訣ではないだろうか¹⁶。

こうした“パラダイム転換”は、個人の内面的なところの世界を豊かにする¹⁷。その結果、不確かさや疑いのなかにいられる忍耐力を増す。その点で、宗教家による精神修行・芸術家による創作活動・研究者による新発見・匠の技の伝承などの様々な場面で必要とされる創造的なプロセスに近い（ラマ・アナガリカ・ゴヴィンダ, 1991）。ここに「解明不可能」とトルストイが断じた「創造の瞬間」を解き明かす鍵が隠されている。その鍵こそ、外面的な言語表現ではなく、内面的な情熱・意志・意味を媒介としたところの飛躍——すなわち、本章で試みる“創発の仕掛け”——にある。この「創造の瞬間」を“創発の仕掛け”の実践を介して捉える“トートロジー”（同義反復）——すなわち、ある種のアブダクション——に、言葉による定義ではなく「実物による指し示し」として知られている“実物定義”（ペイトソン, 2001; ポラニー, 2003）の醍醐味がある。その双方向的な形態として“対話（ダイアログ）”というダイナミックな関係が位置づけられるのではないだろうか。

佐藤ら（2019）は、「自己とは他者との対話を通してつくられており、人の内的世界は外部世界と一つの統一体となっている」というミハエル・バフチンの主張に注目する。つまり、対話によってお互いが触発され、自己の考えが修正され、新しい考えが創造される。この“対話”というダイナミックな関係は、言語の「要素」や言葉の内容に還元することができない。その関係は言語ではなく対話する者の「人格」に属するからである。こうして、対話を支える言語的思考という複雑な統一体は、言語の「要素」にではなく、言語的思考に特有な性質を持つ単純な対話形態としての「単位」（言葉の発達の意味）に分ける分析法が提案された（ヴィゴツキー, 2001）。佐藤ら（2019）が、さらに注目するのは、ドストエフスキーの作品である。小説全体が対話的だと捉える。独自の人格をもつ登場人物同士の意識が対話的に出会い、展開がはじまる。それをポリフォニー小説¹⁸と絶賛する。

すなわち「はじめに」に「おわりに」が暗示されており、その本質が「思考か言語か」の二項対立ではなく「思考と言語」の循環、さらに言えば、“対話”というダイナミックな関係によってお互いに他者を介して自己が創られる。それが、共創的な循環過程としての“自己・非自己循環”（村瀬, 2000; 村瀬, 村瀬, 2022a, b）と言えるのである。

¹⁶ 「私は何者であるのか」と“自分の存在 (being)”を問うことによって、自分のことが分かるようになると同時に、他者のことも分かるようになる。その結果、社会との絆を結ぶことができ「答えのない世界」を生き抜く力になる（九門, 2022）。

¹⁷ 心理学者のカール・ユング（1991）は「個性化過程」という独自の用語を用いて「自分の特性を意識する個人となる」ことを目標とすべきと論じている。この観点から、“自分の存在 (being)”を問うことに加えて、“自分の発展 (becoming)”と向き合うことを強調する。「答えのない未知なる世界」を生き抜くには、「自分は何者なのか」と自問・自答しながら、“一人の学び”から“他者と共創する学び”へ、そして“問題を乗り越え続けていく学び”へと、“パラダイム転換”を実践していかなければならない。そのためには、“対話”というダイナミックな関係（自己・非自己循環）を介して、自己を知り、非自己を知り、双方が発展的に変容し続ける必要がある（村瀬, 村瀬, 2020a, b; 2021; 2022a, b; Murase, et al., 2021）。この観点が、本章で論考する‘ケア共創’（現象論・認識論・実践論の展開）と深く繋がる。

¹⁸ ポリフォニーとは、複数の声部からなる音楽様式で、それぞれの声部が独自の旋律を主張しながら、相互に対等の立場でからみあっていく。

2. トルストイが解明不可能と断ずる「創造の瞬間」——芸術的な‘感染’の力

前節で指摘したように、トルストイは、「創造の瞬間」は解明不可能と断ずる。その一方で、冒頭で引用したように、次のように述べている。「それは、いとも簡単に引き起こされているように思われるが、演奏者が限りなく小さなきっかけを見つけるその瞬間に生ずる」と。その瞬間を引き起こすきっかけは、人から教えられることも、教材によって学ぶこともできず、あくまでも自分で発見して実践する必要がある。この「創造性リテラシー」（後編、第7節「漫画の極意」参照）という観点こそ、音楽演奏に限らず、新理論の創造、役者による渾身の演技、医療・看護ケアなど、あらゆる創造過程に通じる普遍性がある¹⁹。

2.1. ネガティブ・ケイパビリティ——破壊性と創造性のジレンマ

「ネガティブ・ケイパビリティ」は、自己鍛錬の‘学びの力’でありながら、同時に自己と他者（非自己）が豊かな関係性を結ぶ‘ケア共創の力’でもある（村瀬、村瀬, 2021）。なぜなら、バラバラな状況に統合的に働きかけて新たな学びを深めようとする忍耐力は、認識面ばかりでなく、現実統合的に働きかける行動面にも使えるからである（川喜田二郎、1967）²⁰。そのために、行為を伴う‘ケア’においても、相手の気持ちや感情に寄り添いながらも、分かった気にならずに結論を棚上げできる忍耐力が必要とされる。いわゆる‘待つ力’である（村瀬、村瀬, 2021, 38頁）。

文学作品から「ケアの倫理」を読み解く小川公代（2021, 19頁）によれば、「他者の言葉を聞こう、他者の気持ちを理解しようとすることは忍耐力が必要である」。その点で、「文学の営為にも通じる」。なぜなら、「物語を創作すること、あるいは読むことは、誰かの経験に裏打ちされた想像世界に向き合い、じっくり耐え抜くプロセスでもある」からである。

そうであるならば、「創造の瞬間」を論考するにあたり、その輝かしい瞬間ばかりを追い求めるのではなく、その瞬間から遠のいている状況である「ネガティブ・ケイパビリティ」をどのように実践できるのか、「沈黙の世界」（ピカート, 2021）を如何に享受できるのか、と問うてみることも意義深い²¹。創造性を求めて苦悩し続ける人類による実践方法から、新たな発見があるに違いない。おそらく、作家ばかりでなく、作曲家も同じような悩みを抱えているのではないだろうか。私たち筆者は、どのようにして作曲家が、「創造の瞬間」を引き寄せているのだろうか、そのことをずっと作曲家に直に尋ねてみたいと考えていた。

¹⁹ 2017年ノーベル経済学賞で注目された「ナッジ理論（Nudge Theory）」、すなわち「小さなきっかけで、自発的な行動変容を促すアプローチ」（Thaler and Sunstein, 2007）にも通じる観点が含まれている。

²⁰ 川喜田二郎（1967）は『発想法——創造性開発のために』で、次のように強調する。個人がバラバラなデータを組み合わせて複雑な現実世界を認識する方法として“発想法（KJ法）”がある。ここで「データ」を「人間」に置き換えてみよう。すると、人間集団が複雑な現実世界に統合的に働きかける行動面にも、同じ方法が使えることが分かる。

²¹ 大地震前の兆候、未病段階のケア、滞りなくうまく行っているからこそ見過ごされがちな状況など、目に見えない事象にこそ、「創造の瞬間」を決定づける鍵が隠されているのではないだろうか（Hollnagel, 2014）。

2.2. “Eureka (ユリーカ)” 「分かった！」——どのように引き寄せられるのか

2021年12月18日のオンライン・シンポジウムのパネル討論の際に、私たち筆者はサウンドアーティストの岡野弘幹氏に「どうすれば思想を音楽として表現できるのか」と尋ねてみた。岡野弘幹氏は、「スタジオに入ったからといって、作曲ができるわけではない。できないものはできないのです。そういう時はあきらめるほかない。ところが、孫と話したり、鳥の声を聴いていると、ふと音楽が浮かんでくる」と語ってくれた。この語りは、古代ギリシャの数学者・アルキメデスの“Eureka (ユリーカ)” 「分かった！」を、私たち筆者に‘文字通り’体験させてくれた。

2021年12月26日、筆者は家族と休暇を楽しみながら立ち寄った古書店で、『表現アートセラピー：創造性にかかれるプロセス』（ナタリー・ロジャーズ、2000）²² という書籍を、偶然に見つけて購入した。その中で、著者のロジャーズが名付けた「クリエイティブ・コネクション（Creative Connection）」に惹きつけられた。作家であれば、「机に向かう前に、散歩に出かけると執筆が進むこと」を経験的に知っている。これが「クリエイティブ・コネクション」である。つまり、運動や遊びに夢中になっていると、その表現形態が、知らず知らずのうちに感情の働きを豊かにする（【コラム3参照】）。その結果、創作活動といった別の表現形態に豊かな影響を与える。そして、休暇を楽しむ私たち筆者も、思わずこころの中で“Eureka (ユリーカ)” と叫んでいた。

トルストイの言う「芸術的な‘感染力’」のきっかけというのは、日常のいたるところに存在している。ところが、そのことに私たちはなかなか気づかない^{23 24}。ということは、子どもの学習過程や病いの癒し、あるいは病いの再発、老いてなお健康に生きるなど、芸術家や研究者に限らず、あらゆる人々が日々の生活で直面している課題ではないだろうか。

3. 思想が言葉にならない——パラドックスを経験する

実際、「思想が言葉にならない」という経験は、詩人・思想家の創作活動に共通した悩みと言える（ヴィゴツキー、2001）。その理由として、「思想の中では同時的に存在する概念が、書き言葉のなかでは経時的にしか記述できないからである」と説明されてきた。しかし、この説明はいささか‘論理的’すぎる。「思想と言語の関係」の説明として、論理だけではなく、他に感情や感覚や直観にも訴えかける‘説明’が必要不可欠ではないだろうか。

²² ナタリー・ロジャーズは、父に哲学者のカール・ロジャーズ、母に芸術家のヘレン・エリオット・ロジャーズを持ち、心理学者のアブフハム・マズロー博士の研究室にて修士号を取得した。彼女の生い立ちが、「クリエイティブ・コネクション」であったと言える。

²³ 正確に言えば、日常のあらゆる時間とあらゆる場所が、学びにおける「創造の瞬間」と言える。睡眠中でも、散歩中でも、入浴中でも、「創造の瞬間」はおとずれるからである。しかも、沈黙（ピカート、2021）や雑音（Hollnagel, 2014）にさえも、劇的な飛躍に必要な「情報」は潜んでいるものである。その意味では、創造的な学びは、あらゆる時間と空間で起こると言える（小林、2008）。

²⁴ 既に知っていることが、新たな気づきのきっかけになるとは思ってもみない。その意味で「知っているということを知らない」。これが“既知の未知（known unknown）”である。一方で、「新たな気づきのきっかけになるとは思ってもみない」ということに気づいてさえいない。つまり「知っていないということを知らない」。これは“未知の未知（unknown unknown）”と言える。詳細は、本書の「ポストパンデミックとケア共創看護学」（村瀬、小林、2023）を参照のこと。

心理学者のカール・ユングは、「新しいものを生み出すのは、知性の仕事ではなく無意識にある内的強迫からでた遊び衝動の働きである」と指摘する。要するに、「科学はもとより、あらゆる創造的活動は意識的な論理思考だけでは推進することはできず、無意識的な直観のはたす役割が極めて大きい」と言える。ここに、言葉による「匠の技」の伝達が難しい理由がある。西洋ルネッサンス期の美術を研究している平川佳世氏によれば、芸術は太古から非言語コミュニケーションのツールであった。しかも、今なお「創造的な学びの本質でありつづけている」と言う。実際に、弟子は師匠の作品を模写することによって、師匠の思想を自得することが期待されている。一流の作品を真似る。大自然の迫力を真似る。その際に、言語は無用である。この本質こそ、先に述べた“実物定義”に他ならない。

3.1. キルケゴールが指摘する二重のパラドックス

演劇家で俳優のスタニスラフスキーは、「お菓子を食べる」という当たり前の行為でさえ、書き言葉で表現するには数冊の本を書かねばならないと嘆く（スタニスラフスキー, 2008, 390 頁）。無意識に生じる単純で自然な感情や体験でさえ、それを意識的に分析して言葉で説明しようとする、たちまち複雑な現象になってしまう。そのために、キルケゴールをして「あらゆる思索のなかで最高のパラドックスは、思索によって考えることのできないものを見いだそうとする試みである」と言わしめた（エドワーズ, 1988, 127 頁）。

実は、このパラドックスこそ、「思想が言葉にならない」という経験を繰り返してしまう本当の理由であると思われる。確かに、正解を求める教育現場では、論理的思索によれば誰もが同じ結論に導かれる。しかし、危機や不確かな状況が絶えない混沌とした世界において、意識的に思索を重ねるだけで簡単に答えを見出せるわけではない。むしろ、無意識的な行為や直観（直感）、あるいは芸術（アート）の‘感染力’を頼りにして、答えのない状況に耐える力である「ネガティブ・ケイパビリティ」を發揮できるかどうか、「沈黙の世界」（ピカート, 2021）や「雑音」（Hollnagel, 2014）を活かすことができるかどうか。そのことが試されている。キルケゴールはさらに続ける。「パラドックスこそ思索家の情報の源」である（エドワーズ, 1988, 127 頁）。すなわち、「創造性はパラドックスから創発する」と言える。

ここで、問題の本質は再びパラドックスであることを確認しておきたい。つまり、私たち人類は、生活のなかで「答えのない世界」に日々翻弄され続けている。ところが、「答えのない世界」——すなわち、「問題ばかりの世界」——であるからこそ、答えが無制限に創発し得る。要するに、「問題ばかりの世界」であるからこそ、「問題ばかりの世界」を生き抜く知恵の宝庫と言えるのである。ここに、パラドックスがある（ポリア, 1954）。

「創造の瞬間」を論考するにあたり、その輝かしい瞬間ばかりを追い求めるのではなく、その瞬間から遠のいている状況である「ネガティブ・ケイパビリティ」をどのようにして実践しているのだろうか、と問うてみることから論考を続けてきた。そこから見えてきたことがある。「創造性」と「非創造性」（「ネガティブ・ケイパビリティ」の実践や「沈黙の世界」や「雑音の世界」）は、二項対立する状態ではなく、同じ発達・発展過程における、異なる

局面（時間的な差異）であり、異なる側面（空間的な差異）でもある。そして、それらの両方（時間・空間的な差異）でもある。しかも、そのいずれでもない。このテトラレンマ的柔軟性に、無限の可能性が拓かれている【コラム 3 参照】。

*****【コラム 3: テトラレンマとジョハリの窓】*****

インドでは、テトラレンマ (Tetralemma) と呼ばれる論理がある。テトラレンマでは、(1) A である、(2) B である、(3) A でもあり B でもある、(4) A でもなく B でもない、という 4 つの形式論理を考える。確かに、二項対立では、(1) A である、(2) B であるのどちらかを想定している。これに対して、テトラレンマでは、より多くのオプションが用意されている。そのために、思考がより柔軟に展開される。なぜなら「A でもなく B でもない」からこそ、どちらもでない新しい C の創発が“弁証法”的に可能となるからである。

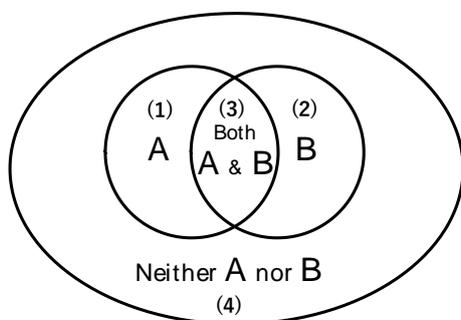


図 8: テトラレンマ

(3) Both A & B Open	(2) B Blind
(1) A Hidden	(4) Neither A nor B Unknown

図 9: ジョハリの窓

米国の心理学者ジョセフ・ルフトとハリ・インガムが 1955 年に提案した「対人関係における気づきのグラフモデル」がある。提案した 2 人の名前を組み合わせ、「ジョハリの窓」と呼ばれるようになった。(1) A だけが知っている「秘密の窓」(Hidden)、(2) A は知らないが B だけが知っている「盲点の窓」(Blind)、(3) A も B も知っている「開放の窓」(Open)、そして (4) A も B も知らない「未知の窓」(Unknown) がある。このジョハリの窓は、自己と他者の関係を論じるコミュニケーション心理学で使われている。

図 8 と図 9 を比較すると、東洋と西洋の思想が、独自に展開しながらも、不思議な類似性を示していることがわかる。

3.2. “既知の未知 (known unknown)” への気づき

2020 年 7 月 30 日、京都大学大学院横断教育科目を受講する大学院生と学生に、一連の講義 (15 回) を受けた印象を率直にレポートとしてまとめてもらった。なまなましい体験が語られているので、以下に引用したい (村瀬雅俊、2022、Journal of Quality Education Vol.11, 55 頁、61 頁、2022 より)。

【2020 年度・社会人大学院生】

私が講義のなかで最も大きな気づきを得たのは、最終講義のときである。大学院講義の最終回で、私は自身のこれからの目標について発表した。「大学院に入学する前、私は仕事をしていた。サービス業ということもあり、人が求めるものを察知して提供することは得意としてきたが、新しい情報を自身のなかにある情報とつなげて、新しい何かを“創造”する（いわゆるクリエイティブな）能力に欠けている。そのため、今後クリエイティブな能力を身につけたい。」と話した。しかし、その話を聞いた村瀬先生は、「人が求めるもの（情報）を自分の中に取り込んで、求めるものを提供しているプロセスって“創造”そのものじゃないの？」とおっしゃった。

私は、目から鱗が落ちた。

「そうか、自分は創造性がないわけではなく、気づいていないだけだったのか！」と気づかされたのだ。創造性はおそらく誰もが持っている能力だ。しかし、気づいていない人も多い。他人からみると見えるものが、自分の目線からでは見えていないことがある。私は、この講義を受けるまで、創造性とは持って生まれた“才能”、もしくは身につけるものだと思っていた。しかし、講義を受講し「“創造性”とは、“身につける”ものではなく、“気づく”もの」だと考えるようになった。この講義では、気づきのヒントが随所に散りばめられていた。通常の講義では、“正解”を求めるが、この講義においては“正解”が存在しない。楽しみながら対話を行い、主観と客観を交互に繰り返しながら、新しい気づきを得るのである。このプロセスは今後の人生において大きな役に立つと思っている。

この大学院講義では、毎回提出する課題に対して、受講生の一人が次のように回想する。「私たちは一人ずつ考えたことを発表し、先生が最後にその問いについてどう考えればよいかを説明するというように進んでいった」。ここで、共有しなかったこととは、「結果ではなく結果に至るプロセスこそ大切」という観点であった。受講生たちは次のように言う。「すべての課題において、表面的な理解にとどまっていたはいけない」。「自分で考える段階ではとても苦労したが、授業の中で他の受講生と意見交換したり、先生にフィードバックしてもらったりすることによって、自分の考えをより高次なものにすることができた」。「自分の中で、思考が高次なものへと変化することを明確に感じられた」と。このように創造的学習方法が、自得されていったのである。その際に、重要な要素こそが、「集団の力」である。他者を‘模倣’することで、「学び方」を学びはじめ、そのプロセスは単なる模倣を超えて、こころの創造へと向かうからである（3.4節を参照）。

ある受講生による、次の決意表明には感動する。「将来自分の境遇も世界の状態も、どのように変化していくかは分からない。しかし、この講義で学んだ内容はきっと重要な意味を持つと確信している」。まさに、小さなきっかけから、大きな変革が生じ得ることを実感できた瞬間である。

3.3. “未知の未知 (unknown unknown)” と “既知の未知 (known unknown)” への気づき

拙著 (村瀬、村瀬、2021) のタイトルに ‘ケア共創’ とある。その意図は、ケアを医師・看護師が患者に一方的に提供するという意味ではなく、医師・看護師と患者の双方が共に一緒になってケアを創っていくという意味を表現したいことにある。その際に、医師・看護師と患者の双方が、それまでの人生の中で気づかずに創りあげてしまった固定観念や膠着した関係性に逆に縛られているという状況——すなわち、以下でも繰り返し述べるように「そうした状況を知らない」ばかりでなく、そうした状況を「知らないということすら知らない」 (“unknown unknown”) 状況——が問題となる (van der Leeuw and Murase, 2021; 村瀬、村瀬, 2022a)。その状況を改めて ‘手放す’、あるいは ‘留保する’ ことが望まれる。これが、第V部のタイトルにある「自然 (じねん) にゆだねる」という意味である。これまでに積み上げてきた固定観念を放棄する。そのことが、自然な理解に繋がるというパラドックスである。その意図は、「ネガティブ・ケイパビリティ」への回帰でもある。

ここで、“未知の未知” への気づきが、いかに困難なことであるかについて、具体的に体験してみたい。みなさんは、【コラム 3】で示した図 6 や図 7 で、“未知の未知” を指し示すことができるだろうか。実は、私たち筆者も、対話を重ねることでようやくわかりはじめた。図 5, 6 における「(4) A でもなく、B でもない」という領域は“未知 (unknown)” である。それでは、“未知の未知 (unknown unknown)” はどこにあたるのだろうか。実は、示されていないことによってこそ、逆説的に ‘示されている’ 領域や状況がある。それが、“未知の未知 (unknown unknown)” にあたる。

つまり、図 8, 9 において明示されていない領域や状況として、どちらの図においても示されていない図式の「外」が “未知の未知” と言える。テトラレンマやジョハリの窓という枠組み自体が成立しない、その「外」の領域も存在しているのである。もちろん、例えば図 8 の枠組みの中でさえ、“未知の未知” が潜んでいる。

そのいくつかの可能性を、図 8 に基づいて例示してみよう。

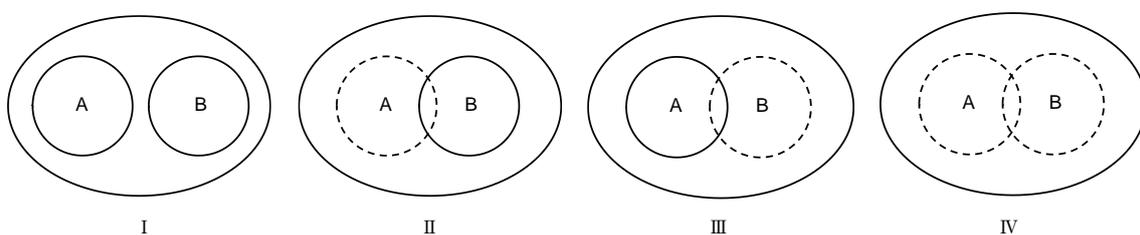


図 10：“未知の未知 (unknown unknown)” の状況

図 10 の I では、A と B に重なりがない。II では、A の境界が壊れている。III では、B の境界が壊れている。IV では、A と B のどちらの境界も壊れている。人間関係を考えると、I では、対話の機会が閉ざされている。II (III) では、A (B) の自我境界があいまいである。IV では、A と B の自我境界があいまいである。

確かに、人間の生老病死においては、自我境界の成立と崩壊は、不可避的なプロセスである。しかし、そうした状況は、自ら体験して、さらにはその体験を省察してはじめて気づくことである。そのように考えると、“未知の未知”はどこまでも広がっている。というよりも、まさに‘生き物’のように変幻自在で捉えどころがない。ほかに、“未知の未知”の例はないだろうか。

システムの安全性に関する研究者・エリック・ホルナゲル (Hollnagel, 2014) は、次のように指摘している。私たちは‘目に見える’問題や危機に着目し過ぎてきたのかもしれない。あまりにうまくいっているために、かえって誰にも気づかれない出来事が、当たり前の日常に数多くあると思われる。ところが、私たちはそのような‘目に見えない’出来事が存在していることを知らない。そればかりでなく、そうした出来事を「知らないということすら知らない」。これも“未知の未知 (unknown unknown)”である。

同じ状況を、次のように言い換えることができる (脚注 20 参照)。私たちは日常的にうまくいっていることを‘当然’の出来事と思いがちである。そのために、「うまくいっている出来事が、実は問題をつくり出す出来事と同じ原理によって生じている」などとは思っていない。これが“既知の未知 (known unknown)”である。創造性と破壊性は、同じ原理から創発し続ける複雑現象の異なる空間的な側面であり異なる時間的な局面なのである (村瀬、2000)。具体例として、がん研究から思いもかけずに生命進化の本質が明らかになってきたことが挙げられる。がんは細胞進化だったからである (村瀬、村瀬、2022b, 第 9 章)。

注意深く眺めてみると、“未知の未知”が次々と露わになってくる。システム科学者のドネラ・メドウズ (2015) によれば、一般的にシステムを構成する要素は目に見える。ところが、要素間の相互作用は目に見えない。同じシステムのように見えても、目に見えない相互作用が異なるために、同じ刺激への‘応答’は全く異なってしまう。目に見える要素に着目している限り、こうした事態——すなわち、目に見えない“創発の仕掛け”——を理解することは難しい。システムの複雑な挙動を理解するためには、‘要素’ばかりでなく‘要素間の関係性’という異なる観点がどうしても必要なのである。

『学習する組織』の著者であるピーター・センゲ (1991) によれば、私たちが組織の一員として働く際、組織はあたかも自分たちの「外」にある‘物質’であるかのように考える。そして、自分たちはその組織の囚人であるかのように振る舞う。そのために、何か問題が発生すると、その問題を引き起こしているのは、自分たちの「外」にある組織であると思いつむ。その組織に、私たちが拘束されていると思いつんでいる。実は、これが幻想であることに気づくべきなのである。組織とは、私たちの「外」にある‘物質’的な存在ではない。それは、私たち人間の「内」なる思考から生まれた‘生き物’なのである。

心理学者のカール・ユング (1991) が主張する「個性化過程」とは、「自分の特性を意識する個人となる」ことを目標としている。つまり、「自分は何者なのか」と自問することで、“未知の未知”の呪縛から解放される (脚注 16 参照)。なぜなら、“未知の未知”に創造性と破壊性の萌芽が秘められているからである (脚注 20, 22 参照)。

3.4. パラドックスを積極的に活用する——知らないことによって知りうること

意識的な思考、無意識的な直観、それらのあわい（間）には、さらなる「未知の可能性」——すなわち、“未知の未知（unknown unknown）”——が潜んでいた。その可能性を如何にして開示することができるか。これが時代を超え、人種を超えた探究課題と言える。

私たち筆者は、『未来創成学の展望』（山極壽一・村瀬雅俊・西平直、ナカニシヤ出版、2021、14頁）の中で、次のように論じた。

『弓と禅』の著者オイゲン・ヘリゲル（1981）は、日本の様々な芸術が仏教による精神的な心構えを前提としていると指摘する。「知らないことによって知りうること」、それは思弁や悟性によっては考えられない「直接に経験されるもの」と了解し、さらに進んで「それとひとつになる」ところまで道を切り開く、神秘的錬磨を強調する。この神秘的錬磨には、言説は一切存在しない。その意味では、弓道は外面的から捉えられているようなスポーツではなく、「精神修行の道」と説く。

ここで注目すべき点は、言葉による説明は不要であるばかりでなく、邪魔でさえあるということ。ロウソクの炎を灯す際に、すでに燃えているロウソクで点火する。これと同じように、師匠は正しい芸術・武術の精神をころからころへと、それが明るくなるように‘点火’する。外面的な作品・形ではなく、内面的なところが重要である。つまり、師匠が弟子に内面的なところを生きて示す。それと同時に、弟子は一人で歩み始めることが期待される。伝承とは、（単なる形の）模倣ではなく、（模倣にもとづきながらも模倣を超えた）ころの創造である。

その本質を、物理学者の朝永振一郎（2000、98頁）の言葉から読み取ることができる。朝永は、「数学がわかるというのはどういうことであるか」と自問して、「数学を勉強してほんとうにわかったという気持ちは、おそらくその数学が作られたときの数学者の心理に少しでも近づかないと起り得ないのであろうか」と自答している。この点に関連して、「ウパニシャッド——生命の本質」（1969、129頁）に述べられている以下の言説に注目したい。「人はことばを知ろうとしてはならない。ことばを話す主体を認識すべきである。……いづれか一方からではどんな事象も成り立たないであろう」。重要なことは、外的表現と内的精神の循環過程から多様な創造性と破壊性が発露することにこそある、と言える。

私たち筆者は、2022年に発行された京都大学大学院文学研究科紀要『日本哲学史研究第18号』特集「日本哲学と科学」（村瀬、村瀬、2022a、100頁）の中で、次の点を指摘した。

「言葉による説明を尽くしても、表現しきれないもどかしさが残る。ラマ・アナガリカ・ゴヴィンダの『チベット密教の真理』によると、言葉の本質はその言葉が持つ意味だけに尽くされていない、と言う【本章コラム4参照】。もともと言葉には、概念には翻訳できない「質」が表現されていた。その「質」とは、感覚をかきたて、存在を高め、他のものと共振できる働きである」と。

その上で、ゴヴィンダの主張を踏まえながら、次のように論考した（村瀬、村瀬、2022a, 102 頁）。

言葉の誕生が人類の誕生であり、言語の創造は、最高の完成度をもつ芸術と言われる。ただし、そのためには実在が人間の声の振動へと変換され、それがさらに人間の魂の生きた表現へと変換される必要がある。おそらく、言葉が誕生した太古では、言葉が力と実在の中心であったに違いない。言葉は連続する無限の経験の結果であり、思考を超えたものから生成されるとゴヴィンダは言う。ところが、習慣によってそれを単なる表現手段として型にはめてしまった。ここに問題があった。自己の体験から信念を生み出さなければならない。その信念は理法や実在との調和を経て内的確信へと成長していく。この種の信念は、科学、哲学、密教、芸術、あらゆる心的あるいは精神的活動にとって不可欠な前提条件なのである。

ここに、私たち人類が直面し続けてきた「言葉の「壁」——すなわち、伝承を拒み続けてきた「表現の限界」——がある。例えば、数学には二つの科学的な側面がある（ポリア、1954）。一つは、ユークリッド幾何学（BC330-BC275）に代表され、他の科学が模倣を試みてきた最初にして最大の「演繹科学」、もう一つは、数学とともに長い歴史を持ち、数学的原理や概念を発見する方法や法則を学ぶ「発見科学」である。数学という客観的な「成果」を、私たちはよく知っている。それはよく見えるからである。ところが、成果を「生み出す過程」には、気づきにくい。なぜなら、「どのようにして数学が構成されていくのか?」、その「創造の過程」を観察することは難しいからである。私たちが発見科学よりも数学に馴染みやすさを感じる理由が、ここにある。

この観点を踏まえるならば、2000年に提唱した「自己・非自己循環理論」を、客観的に説明できる対象と短絡的に捉えてはいけない。この理論は、自己の「外」の世界や自己の「内」の世界を理解するための方法論であり、さらなる発展的な展開を引き出す道具として活用することで、主体としての自己の終わりなき成長が求められているからである。

ここに、「一人称の主體的な自己（内）」と「二・三人称の客體的な非自己（外）」と「それらの対話的な自己・非自己循環過程（間）」に基づく逆説性（パラドックス）・互換性（アブダクション）・包摂性（フラクタル）の仮定が、「自己・非自己循環理論」それ自体によって“ブートストラップ（bootstrap）”的に根拠づけられていたのである（村瀬、村瀬、2020, 4 頁; ドゥアンヌ、2021; 44, 115 頁、参照）²⁵。

²⁵ “ブートストラップ”とは、ブーツのかかと側の先端に付けられたつまみのことで、ブーツを履くときにここを引っ張り上げる。比喩的には、ブートストラップを引っ張って、自分自身を持ち上げるというイメージ（不可能なことであるが）から、外部からの助けを借りないで自助努力することを指している。例えば、子宮の中の胎児では、遺伝による制約のもとで神経系の土台がつくられる。たとえ、外部環境からの入力刺激がまったくなくても、胎児の脳神経系が自発的に活動をはじめ。この自己刺激によって、神経回路が自律的に構成されていく。これが“ブートストラップ”的な構成過程である。さらに、外部環境からの入力刺激を学習しはじめる段階になると、神経回路網が最終的に仕上げられる（ドゥアンヌ、2021, 115, 142 頁）。

素粒子物理学者・Nicolescu (2017) によると、ブートストラップという言葉は翻訳不可能であるが、強いて意味付けするならば「一貫性（self-consistency）」が妥当であると言う。先に述べたように、脳神経系は外部からの入力がなくとも、自発的な神経興奮活動による自己刺激に基づいて神経回路網が構成されていく。この自発的かつ自律的な構成過程において、「一貫性」を認めることができるのである。

***** 【コラム4:「不伝の伝」の極意に迫る】 *****

ここで「自己・非自己循環理論」を、自己や世界、さらに自己や世界を理解する方法論として捉えてみる。人間は「外」なる世界を発見し、自身の「内」なる世界をも発見した。「外」なる世界の理解を試みる場合と同様に、自己を理解するには「現在」ばかりでなく、過去の履歴を理解する必要がある。同時に、未来目標を明確にした上で、未来から現在を遡及することも必要となる。そこで、自己は絶えずより高次の「存在」を模索することが要求される。ところが、そうした高次の「存在」が根本的であるため、簡単に表現することができない。

なぜなら、それはある種の体験に結びついているに過ぎず、その体験を別の「何か」に‘翻訳’することはできないからである。つまり、その体験は、見る・考える・触れる・味わう・聞く・嗅ぐといった、どんな体験よりも真実であるために、その体験を思考することも、想像することもできないのである。その体験は、あらゆる感覚に先行し、かつそれらを包含し、それゆえ、それらの中のいずれとも同一視できない（ゴヴィンダ、1991）。つまり、自己遡及性・自己言及性・自己超越性のすべてを合わせ持っていると言える（村瀬、村瀬、2022a）。

そのために、「どうすればその体験を伝えることができるか」が人類にとっての大きな課題であり続けてきた。具体的には、神話や物語による伝承文化が世界に根付いた。その一方で、その究極の体験は「象徴」すなわち「シンボル」という方法によって、暗示されるほかなかった。そのシンボルの一つが、曼荼羅である。この象徴は、心の深層から自然発生的に生じる。これを創る力が、予言者詩人の音声を通して発せられた「マントラ」と言える。

ゴヴィンダによれば、マントラとは物理的な音声ではなく、精神的な音声と捉える必要がある。というのも、言葉を使用する本来の目的は、思考や観念を伝達することに限られてはいなかったからである。マントラは耳でなく心が聴き、口でなく心で発する。したがって、マントラに関する特殊な体験を自得した人のみが、その力と意味を理解することができる。マントラ自体に、いかなる力も存在しない。それを体験する心があつてこそ、はじめてマントラが作用するに過ぎない。皮肉なことに、この聖なる伝統の伝達手段であるマントラは、歴史的に長く存続していたにもかかわらず、その使い方を知るものは皆無に近かった。重要な点は、マントラの秘密は意図的に隠されていた訳ではない。ただ、自己訓練・自己集中・内的体験・洞察によって、その本質が自得できるということが、十分に理解されてこなかったに過ぎない。まさに、「不伝の伝」の極意に迫る以外に、マントラの神秘は伝承不可能であった。なぜなら、当事者の一人ひとりが、すでに萌芽的にマントラを体験していることが要求されているからである。

ここでマントラについて述べたことは、匠の技、真理の探究、失敗からの学び、病の癒しなど、人類が直面するあらゆる局面において適用することができる。いろいろな局面においても、当事者自らが、すでにある種の‘答え’を体得していなければならない。その意味で、人類共通の‘超課題’なのである。

ここで、仙厓禅師（1750-1837）による円相図の意味が読めてくる（河合隼雄、1977；村瀬、村瀬、2021、154頁）。図11の円相図にはさりげなく「(こ)れくうて茶のむされ」(こ

れでも食べてお茶でものまないか) と書かれてある²⁶。一つの円相をめぐって多くのイメージが生まれ、とどまることなく、定まるところもない。ということは、意識を乱すようないろいろな心境にあつてこそ、無意識にあたりまえのしぐさに没頭する——自然(じねん)にゆだねる——ことで、そうした意識の乱れを鎮めることができる。しかも、岩田慶治『道元との対話』(104頁)によると、お茶は茶碗とそこにはいつている飲み物を連想させるが、実は「虚空」である。岩田の言う「道元禅師の知」とは、「おのずからそれがそうみえてくるような、そういう場に到達するための、方法なき方法である」(105頁)と言う。

2022年9月21日、本書収録のツトム・ヤマシタ氏の論説内容の確認のために、山下美緒さんとやり取りしていた折、春日大社の元権宮司・岡本彰夫さんが「神の世とこの世をつなぐ究極の音楽としての神楽」について書いた以下の文章を教えていただいた。「日本人が目指した究極の音楽の中でも、もっとも奥深い音楽は・・・音のない音楽です。・・・声を出すということは人に聞かせるためなのです。神様に届けるためには心と心のつながりが何より大切なので、声に出さなくとも音は伝わるのです。」

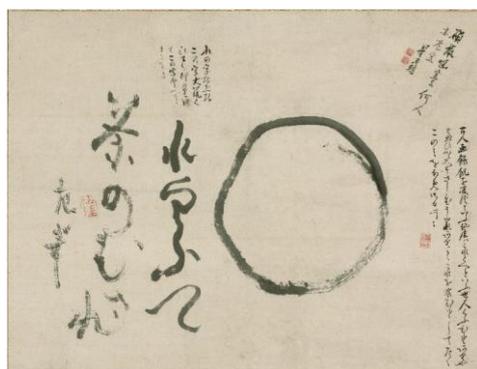


図 11：仙厓禅師の円相図（九州大学文学部 所蔵）

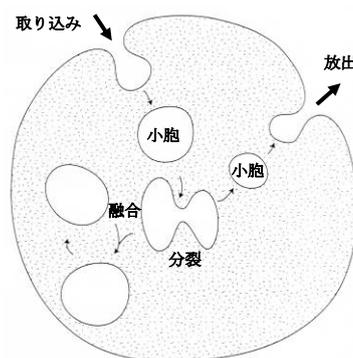


図 12：細胞の模式図

「(二) れくうて茶のむされ」の「こ」の字がない。上にある画賛によると、「れの字の上の この字大嵐く ひもち行けり 誰もこの字そへて よみてよ」と「こ」の字ははネズミに囓られた、とのこと(右の上下2人の画賛も同様)。

図 12 は、生命の構成単位である細胞の様子である。細胞は絶えずに細胞外物質を取り込み、内なる外としての小胞を形成し、不要な物質や情報伝達物質を放出し、細胞内外の社会を構成している。日常の当たり前に行われている細胞の代謝活動が、一人ひとりの人間の生命を維持し、環境に適応し続けている。これからはじまる‘創造’を前にした「沈黙の世界」がここに在る、と言えるのかも知れない。

悟りをひらくきっかけは、どんな些細なことでもよい。自らが、何かに気づき、それと別の何かと関連づけはじめると、ある時、異なる事柄を包摂する一つの説明が見出され始める。これが、「不伝の伝」「方法なき方法」「音のない音楽」と言われる極意ではないだろうか。

²⁶ 禅の老師たちによって描かれてきた円相図がある。それは、「こころ」を表した‘シンボル’と言える。円には、切れ目がなく、上下、左右もない。実際、互いに相手を大切に、協力し合うという「和(なごみ)」は、円に通ずる。そのため、円相は悟りの境地や宇宙観を表すとも言われている。

4. 自己・非自己循環理論——全体性の基本的な「単位」

西洋型客観科学と東洋型循環科学の方法論的な相違点について、図 13・14 にまとめた。客観科学では、観察する主体を研究対象から除外し、直線的に要素間の因果関係を探求する。これに対して、循環科学では、主体を研究対象に含んだ循環過程を基本的単位として複雑現象の本質や意味を探求する。循環過程を基本的単位とするために、西洋型客観科学と東洋型循環科学の方法論的な相違自体も、図 14 点線矢印で示されているように、新たな循環過程に含まれていく。図 14 (下) では、主体である自己は大きな○で表現されており、その中に客体である非自己⑤が含まれ、また、客体である非自己①、②、③、④に含まれている。

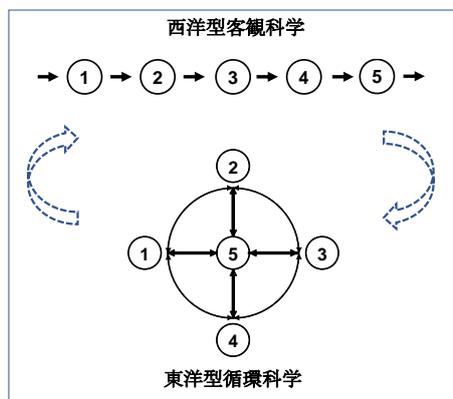
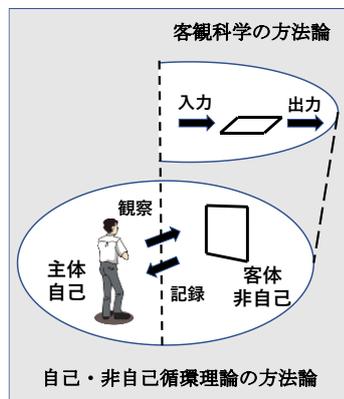


図 13：客観科学と自己・非自己循環理論

図 14：西洋型客観科学と東洋型循環科学

この自己が非自己を含みまた、さらに非自己に含まれるダイナミックな関係を図 15 (上) で表している。私たちが、客体である非自己の内部イメージに基づいて、その存在を認識している様子を図 15 (中) に示している。図 15 (下) では、自己が非自己を認識する様子である。このように自己・非自己循環理論は、多様な状況下で時間・空間的に展開する(図 16)。

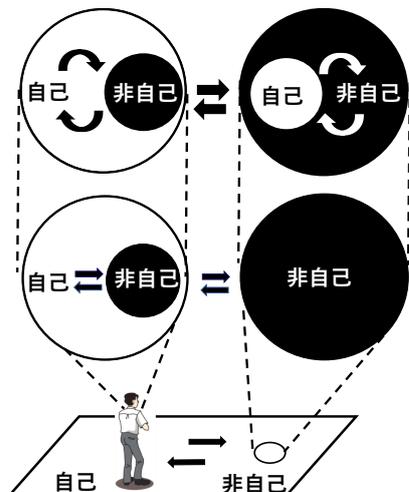


図 15：自己・非自己循環理論

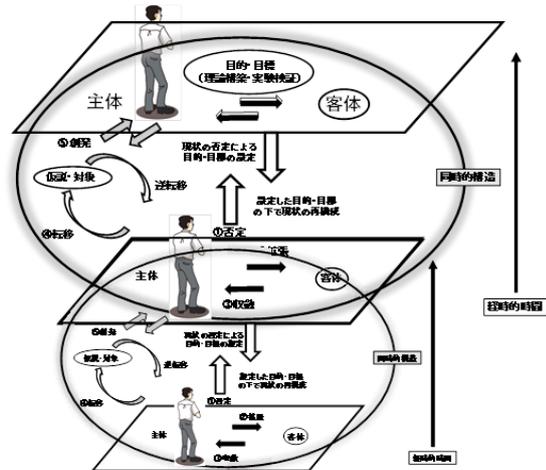


図 16：自己・非自己循環理論の時間・空間的展開

5. 第1部のまとめ

第I部を図式的にまとめたい。このことは、図15・16を統合することを意味している。従来の客観科学では、時間・空間的な関連が一方向的に捉えられがちであった。これに対して、循環科学では、時間・空間的な関連を双方向的に捉えることを提案する。それを模式的に表したのが図17「立体型・陰陽シンボル」である（村瀬、村瀬、2022b）。

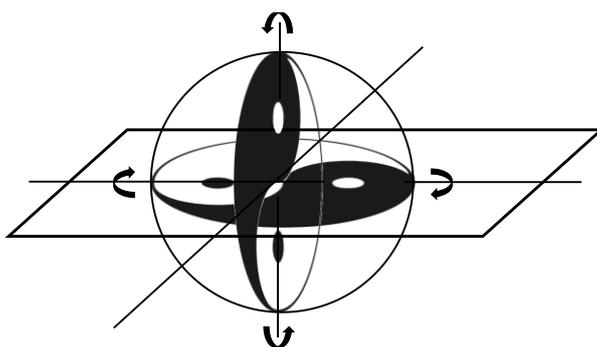


図17：立体型・陰陽シンボル

水平面と垂直面に「陰陽シンボル」を描いている。水平面は空間の広がり、垂直面は時間の展開をイメージしている。空間的には「陰と陽」・「非存在と存在」など、時間的には「過去と未来」・「生成と消滅」などがイメージされる。もちろん、複雑な諸現象を‘過程’から捉える過程還元論に立脚すれば、時間と空間、水平面と垂直面は対立的ではなく、相補的に捉える必要がある。“自己・非自己循環理論”は、この立体型・陰陽シンボルとして捉えられる。

芸術教育学者のベティ・エドワーズ（1986, 148頁）は、自著について「創造性について書きながら、創造の過程を具現化している」と述べた。実際に、エドワーズは創造性を言葉と絵を組み合わせることによって説明するとともに、言葉と絵を道具として用いて実践して見せた。その意味で、画期的な著作と言える。

第1部では、トルストイが解明不可能と断じた「創造の瞬間」に焦点を当てながら、“未知の未知”に秘められた創造性と破壊性の両義性についての論考を現象論的に展開した。どれほど論考を重ねても、全体性を把握することはできない。なぜなら、全体性はこころによる創発を通して、はじめて露わになるからである。私たち人類は、どこまでも“未知の未知”と“既知の未知”に翻弄され続ける。ここに、後編で認識論と実践論を展開する意義がある。

文献

- ヴィゴツキー, レフ・セミョーノヴィチ (2001) 『思考と言語』 柴田義松訳、新読書社
- ヴィゴツキー, レフ・セミョーノヴィチ (2006) 『記号としての文化——発達心理学と芸術心理学』
柳町裕子、高柳聡子訳、水声社、198~199 頁
- ウパニシャッド——生命の本質 (1969) 『世界の名著 1 バラモン教典 原始仏教』 中央公論社 129 頁
- エドワーズ, B. (1988) 『内なる画家の眼——創造性の活性化は可能か』 北村孝一訳、エルテ出版 (原著
1986 年)
- エンゲストローム, ユーリア (2018) 『拡張的学習の挑戦と可能性——いまだここにはないものを学ぶ』
山住勝広訳、新曜社
- キューブラー・ロス, E (1977) 『続 死ぬ瞬間—最期に人が求めるものは』 川口正吉訳、読売新聞社
- クラインマン, アーサー、江口重幸、皆藤 章 (2015) 『ケアをすることの意味——病む人とともに
在ることの心理学と医療人類学』 朝日選書
- コリンズ, ジム (2010) 『ビジョナリーカンパニー 3 —衰退の五段階』 山岡洋一訳、日経 BP 社
- ゴヴィンダ, ラマ・アナガリカ (1991) 『チベット密教の真理——その象徴体系の研究』 山田耕二訳、
工作舎 (原著 1960 年)
- ジュリアン, フランソワ (2004) 『勢い 効力の歴史—中国文化横断—』 中島隆博訳、知泉書房、原著 1992
- スタニスラフスキー, コンスタンチン (2008) 『俳優の仕事 第二部—俳優教育システム』 堀江新二、
安達紀子訳、未来社
- セイックラ, Y., アーンキル, T. (2016) 『オープンダイアログ』 高木俊介、岡田愛訳、日本評論社
- セルヴィーニュ, パブロ、スティーヴンス, ラファエル (2019) 『崩壊学—人類が直面している脅威の実態』
鳥取絹子訳、草思社
- センゲ, P. M. (2011) 『学習する組織——システム思考で未来を創造する』 枝廣淳子、小田理一郎、
中小路佳世子訳、英治出版
- トインビー, A. (1975) 『図説 歴史の研究』 桑原武夫・樋口謹一・橋本峰雄・多田道太郎訳、学習研究社
(原著 1973 年)
- ドゥアンヌ, スタニスラス (2021) 『脳はこうして学ぶ——学習の神経科学と教育の未来』 松浦俊輔訳、
森北出版
- バルト, ロラン (1979) 『物語の構造分析』 花輪光訳、みすず書房
- ピアジェ, J. (1970) 『構造主義』 滝沢武久訳、クセジュ文庫
- ピカート, マックス (2021) 『沈黙の世界 新装版』 佐野利勝訳、みすず書房
- フレンケル, エドワード (2015) 『数学の大統一に挑む』 青木薫訳、文藝春秋
- ペイトソン, G. (2001) 『精神と自然——生きた世界の認識論』 佐藤良明訳、新思索社 (原著 1979 年)
- ヘリゲル, O. (1981) 『弓と禅』 稲富栄次郎、上田武訳、福村出版
- ベロス, アレックス (2012) 『素晴らしき数学世界』 田沢恭子、対馬妙、松井信彦訳、早川書房
- ポラニー, M. (2003) 『暗黙知の次元』 高橋勇夫訳、ちくま学芸文庫 (原著 1966 年)
- ポリア, G. (1954) 『いかにして問題をとくか』 柿内賢信訳、丸善出版
- メドウズ, D. H. (2015) 『世界はシステムで動く——いま起きていることの本質をつかむ考え方』
英治出版、枝廣淳子、小田理一郎訳 (原著 2008 年)
- ユング, C. G. (1991) 『個性化とマンダラ』 林道義訳、みすず書房
- ロジャーズ, N. (2000) 『表現アートセラピー ——創造性に開かれるプロセス』 小野京子、坂田 裕子、
誠信書房 (原著 1993 年)

- 伊藤俊太郎 (2002) 『文明と自然——対立から統合へ』 刀水書房
- 岩田慶治 (2001) 『道元との対話——人類学の立場から』 講談社学術文庫
- 小川公代 (2021) 『ケアの倫理とエンパワメント』 講談社
- 奥野克巳 (2022) 『絡まり合う生命——人間を超えた人類学』 AKISHOBO
- 河合隼雄 (2017) 『無意識の構造』 中公新書
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法——創造性開発のために』 中公新書
- 九門大士 (2022) 「多様性における Being 教育の実践——高等教育における事例研究」 本特集
- 小林朝夫 (2008) 『子どもの「頭のよさ」を引き出すフィンランド式教育法』 青春文庫
- 佐藤公治, 本田慎一郎, 菊谷浩至 (2019) 『臨床のなかの対話力——リハビリテーションのことばをさがす』 協同医書出版社
- 鈴木大拙 (1997) 「自由・空・只今」『新編 東洋的な見方』 岩波文庫
- 戸田提山 (1992) 「良寛における典型と反典型:、『良寛まんだら考』 273-281 頁、「日本学」企画室編、名著刊行会
- 朝永振一郎 (2000) 「数学がわかるというのはどういうことであるか」『科学者の自由な楽園』 江沢洋編、岩波文庫 (初版 1961)
- 西田幾多郎 (1984) 『日本の名著——西田幾多郎』 中央公論社
- 村瀬雅俊 (2000) 『歴史としての生命——自己・非自己循環理論の構築』 京都大学学術出版会
- 村瀬雅俊 (2021) 「京都大学における全学共通科目・大学院横断教育科目——創造性を如何に学び、如何に伝えるか」 *Journal of Quality Education* Vol.11, 41-62
- 村瀬雅俊・村瀬智子 (2020a) 「大統一生命理論への挑戦——自己・非自己循環理論の展開」 3-79 頁、山極壽一・村瀬雅俊・西平直 編『未来創成学の展望：逆説・非連続・普遍性に挑む』 ナカニシヤ出版
- 村瀬雅俊・村瀬智子 (2020b) 『未来共創の哲学——大統一生命理論に挑む』 言叢社 1-350 頁
- 村瀬雅俊、村瀬智子 (2022a) 「未来共創の哲学——「自己・非自己循環理論」の提唱から、「大統一生命理論」の構築」 京都大学大学院文学研究科紀要 『日本哲学史研究』 特集 「日本哲学と科学」 第 18 号, 62-117 頁
- 村瀬雅俊、村瀬智子 (2022b) 『歴史としての生命 増補版——自己・非自己循環理論の構築』 ナカニシヤ出版、1-428 頁
- 村瀬智子・村瀬雅俊 (2021) 『未来から描くケア共創看護学——自然・生命・ころ・技の循環』 大学教育出版 1-350 頁
- 矢野雅文 (2022) 「ポストパンデミック；共創——生命的「知」の展開」 本特集
- 山極壽一・村瀬雅俊・西平直 編『未来創成学の展望——逆説・非連続・普遍性に挑む』 ナカニシヤ出版, 1-350 頁, 2020
- 頼住光子 (2004) 『正法眼蔵入門』 角川ソフィア文庫
- 頼住光子 (2022) 「仏教の自然の捉え方とその表現——道元を視座として」 本特集
- Hollnagel, Erik (2014) *Safety-I and Safety-II: The Past and Future of Safety Management*, Routledge, Milton Park in England
- Jantsch, E. (1980) *The Self-Organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution*, Systems Science and World Order Library. Innovations in Systems Science, Pergamon

- Murase, M. (2018) Chapter 16: A Self-Similar Dynamic Systems Perspective of Living Nature: The Self-nonselself Circulation Principle Beyond Complexity, In: The Kyoto Manifesto for Global Economics (Eds: S. Yamash' ta, T. Yagi, Stephen Hill) Springer-Nature, pp 257-283
- Murase, M. (2021) Creative Complex Systems (eds. K. Nishimura, M. Murase, K. Yoshimura) Springer-Nature, pp 1-429
- Murase, M. and Tsuda, I. (2008) Progress of Theoretical Physics Supplement, Volume 173, pp.1-370, Oxford Academic
- Nicolescu, Basarab (2017) The Bootstrap Principle and the Uniqueness of the World, Cybernetics and Human Knowing, Vol.24, No.2, pp.83-88.
- Thaler, Richard H. and Sunstein, Cass R. (2007) Nudge: Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness, Penguin Books
- van der Leeuw, S.E. and Masatoshi Murase (2021) Chapter 21: Ignorance, Creation, Destruction, In: Creative Complex Systems (Eds: Kazuo Nishimura, Masatoshi Murase, Kazuyoshi, Yoshimura) Springer-Nature, pp.351-372